

蘆花日記
三

大正五年六月
—大正五年十

蘆花日記 三

昭和六十年十月三十日 初版第一刷發行

定価四五〇〇円

著 者 徳 富 蘆 花

監 修 者 中 野 好 一 夫

校 注 者 吉 田 正 信

発 行 者 布 川 角 左 衛 門

発 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一—一九一

電話 東京(03)七六五一(営業)

東京(03)六七一一(編集)

振替 東京 六一四—一二三

印刷 明和印刷株式会社

製本 株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替致します

校訂凡例

- 一、原本は縦書き、横書きの両方があるが、本書ではすべて縦組みとした。
- 一、原本の、挿入位置の不確かな欄外書き込みは、本文の行の頭に●を付し、原則として原本と同一ページの適当と思われる箇所に挿入した。
- 一、原本では、日付の上に○のある日とない日があるが、読みやすさを考え、本書ではすべて○を付した。
- 一、本書では、新字体を用いた。異体字等も対応する新字体に改めたが、著者常用の漢字（嶋、冨、良、鋼など）は、一部原本どおりとしたものもある。かなづかい、送りがなはすべて原本どおりとした。
- 一、濁点、句読点の脱落は、筆記の性質と読みやすさを考慮して、適宜補った。
- 一、難読文字には適宜ふりがなを付したが、著者自筆のふりがなには（ ）を付してこれを区別した。
- 一、誤記、誤字には、その右横にママを付し、必要な場合には、その下に正しいと推定できる文字をへんで囲んで挿入した。
- 一、脱字と考えられるものは（ ）を付して補った。
- 一、判読不能の文字は□で示し、判読不完全の文字は、右横に？を付した。右横に付された？のうち、著者自筆のものには、（ ）を付してこれを区別した。
- 一、本文中で説明が必要と思われる人名・事項については、（ ）内に6ボ活字での割注、または同一日付の末尾に別注を付した。注は新字体、新かなづかいを用いた。

目 次

解題
索引

大正五年 六月一日

七月一日

八月一日

九月一日

十月一日

十一月一日

三

八

一四

二四

三四

四七

五五

五七

大正五年

(六月一日
十一月三十日)

○大正五年六月一日（木）晴

此頃、夕方労働して夜食に飲料が多いせい、夜発汗して寝ざめがちで、朝の起きづらいこと夥しい。然し四時半には起きる。

今日は爽涼冷涼秋の如く、午前中草とりしたせん〔お手伝いさん〕や梅〔お手伝いさん〕も発汗せずになってしまう。午后労働した自分もあついの口癖を出さずに了ふた。

朝、西園を歩きつゝ、憲次〔林憲次、妻愛子（の母方の従弟）〕の事を思ふ。構はずに放擲〔ほうてき〕して置いて、行々青山〔兄蘇峰を指す。蘇峰宅は東京市赤坂区青山南町六丁目にあつた〕の世話でもかける様のあるなら、余は門外漢になり、細君は青山に感謝の念が湧き、それで余が不快になれば細君は死んでしまわねばならぬやうになるであらう、などの予感が起つた。然らば憲次の世話を引受けるか——それは御免だ。そこで上るとMadamに向ひ、〃憲次は多分卿を殺すだらう、其予感がある〃と余は曰ふた。然し細君の曰ふには、男は血を大切にするが、女はそれ程ではない、憲次の事もさして気にはならぬ云々。では兎も角も山鹿〔熊本県鹿本郡山鹿町。現、山鹿市。〕をいつまでも釣つて置くがよいから、軍作〔金木（妻愛子の母の実家の林家があつた）〕は真面目な男らしいから、卿から一切を断る旨を明白に云ふてやれ、と曰ふ。細君もばつちりした方がよいと云ふ。無論利益なやり方でないのは二人共承知の上だ。

憲次問題をそこらで片づけ、新聞を見、日記を書き、それから日課を書く⁽¹⁾。

梅が名刺を持つて来た。実業之日本社の滝沢某、即ち昨年今頃面会を求めた男である。出版か、雑誌の原稿依頼は分つて居る。昨年余が出した返事のはがきを持参。〃面会日時〃と先方で書いたはがきに、ペンで

大正五年六月一日

（若し生きて現住所にあらば）

と書いてあるのは、余の手の跡だ。何と思ふて昨年此様なはがきを書いたやら。一年がさう長いものでもなかつた。実に月日の立つの早いには驚く。実は先方でも此日を待兼ねたと見え、此一両日此はがきの事がちらちら念頭に浮ん

で居たのであつた。然し門に張り出してある通り断はる。はがきは望により返へず。押して面会を求める。気の毒だが今年一年待つてくれ、と答へる。最早此方の岩戸も軟らかなものになつた。

午餐の時此話をして、角田喜三郎〔小説家、劇作家。筆名、佐野天声。評論家角田浩々、歌客の弟〕の三年〔大正三年六月七日、来訪した角田喜三郎に三年後なら会つてやると約束した〕も最早直ぐ過ぎてしまふと噂をする。

午食後、例により苺を食ふ。それからカナブンとり夫婦で出かける。芥子花壇の側に蛇が居た。しきりの丸太と並べた甕の間をのたくつて逃げる。殺せる見込がないから見逃がす。

カナブンにはあきあきする。せんが郵便を持参したから、せんにも手伝はす。

絵入文庫第九卷分巻円振替で払込。

鳥取県のマルタ、マリア〔藤本良子と山崎恭子の姉妹。蘆花の愛読者。「新約聖書」の「ルカ伝」第十章と「ヨハネ伝」第十一章に出る姉妹にたとえている〕から手紙。済まぬことだが、開封もせぬ。手紙をやる男がないから、と Madam 曰ふ。其通りだ。

ニコニコ倶楽部〔牧野元次郎が会頭の「同名の会」による発行〕の六月号を送つて来た。粕谷の変り者の事がのつて居る。非常の吾儘者、実は非常の小心者だから驚く。

カナブンとりが一時間。

それから髻剃。大抵隔日に剃る。Madam も髻剃には大分疲れる。気の毒だが、白髻の生へかぶりはいやだし、自分で剃るのは面倒だ。横になつて剃つてもらうので、大抵其中に眠る。今日も一寸眠つた。細君が馬乗りになり、尻の下に腹を引敷きつゝ剃る。此様な剃り方は、世界唯一である。でも剃つてしまつて、顔が滑つこくなると、好い気もちで、気が若くなる。Madam も己が剃つた顔の滑々するのを愛でて矢鱈に Kiss をする。

午前にも草とりしたが、茶後もせん、梅に草とりさす。自分も下りて瓜類に施肥。本当に久しぶりに肥桶をかついだ。唯二度で、肩が痛くなつた。梅、せんは旦那が肥桶かついでも格別何とも思はぬらしい。白玉〔お手伝い〕が何と思ふか

と思ふたが、もう五時半になりましたと云ひに来た時、余は油粕肥料甕のところに居た。格別の表情を認むる機会がなかった。明治四十三年の夏、余が下の W.C. をあげて居る時、お文〔国民新聞記者石川六郎の後妻〕二枝〔東京帝大法科学生浅村成功の妻〕が上高井戸から帰つて来て変な顔をしたことを思ひ出す。其頃よりも自分は年たけて来たのだ。

大弓。随分と手腕を使ふたあとだが、100本に30本中あたる。先すつ好い、とする。今月末までには30本にはなりたいたいものだ。

それから入浴。頭を洗ひ、Madam の臍下をわんぐりと噛む。

矢羽をつかむなとせんにいましめ、せんも少し曇つた気分になつて居たが、浴後 Sofa の上に仰臥しながら、"どこまでも"〔「お前とならばどこまでも」當時の流行歌〕の「浅間山」のつゞきをきくと、せん気分を一新した。

八時に夕食。ライスカレーだ。三皿食ふ。麦湯の冷たいのを四合瓶一つ飲む。Madam と plaudit をする。好い六月の為に、麦の万歳を祝して。

奥に退き、ネーヴルを食ふ。

母屋に出て将棋一回。余勝。「明暗」〔夏目漱石作〕。早稲田文学の「エヂポス王」〔ソフオクレス作、中村吉蔵訳〕。逍遙ばりの訳しかた、まだこなれずに、重苦しい。面白くない。終らずして奥に退く。

ランプに照らされた二十畳が緑の Curtain の中に和らかな光をあふたし、Comfortable で且美しい。色々の花が夜も美しい。香り高い為め玉水蓮だけは夕方、芝生に出した。

六月一日、まだ蚊帳もつらず、浴衣の寝衣に、かけ蒲団が一枚。好い時候だ。

(1) 大正二年九月から十一月にかけて行つた九州・満洲・朝鮮方面への旅行の記録の執筆。のち「死の蔭に」として大江書房から出版する。

○六月二日 (金) 晴

此頃は夜が早く明ける。四時には明ける。勝手の方が四時半に起きる。せんが表の硝子戸をあけてから余が下りる。

其時はもう日が好い加減上つて居る。

昨夜は仲公を犯す夢を見た。下腹部が石の如く冷硬であつた。犯す女に事を欠いで、仲公とはひどい。尤も逗子で彼女の色目にうんざりした事もあつた。如何に竹崎伯母（順子。母の姉。熊本女学校の創設者）の娘でも御免を蒙る。夢と云へば、今日の新聞に妻の姦通を夢に見て交番に逮あわてゝ訴へた疎忽者がある。疎忽者は近所にもありさうだ。

此頃は朝下りると炭俵を敷いて花壇の草をとる。ドウセ取りつくせぬ草だが、心やりにとる。大分草にも馴れて、そんなに煩悶はしなくなつた。それに畑の方はせんと梅が近日日課の様に少しづつとるので、さつぱりはせぬが征伐の手はつけられて居る。朝、細君と花を採り、細君は上り、余は内庭で草をとつて居ると、乳の案内に來た玉公が座敷の縁に座つて丁寧にお辞儀マツマツ（儀）をする。余が居るものと思ふたらしい。庭から笑ひ出したら、玉公羞かしい容子をした。如何にもあどけなくて可愛かつた。

此頃の朝食は、乳を Teacup 一杯、角砂糖二つを入れ少し台湾紅茶を入れる、（牧〔辰二。台湾民政。愛読者〕から貰つた台湾茶が沢山にあるのでそれを消費する為に）。雞卵全熟二個。フランスパン四五片。青葉に包まれた書院、夫婦相對し、玉の給仕で朝食する。

今日から日課の為、克己して新聞を午后に廻はす。然し日記、園芸日記は一番に書く。

外にばたばた足音がして、やがて畑の方で玉とせんの話声がする。少し氣障で、鈴を鳴らして細君を呼び、聞いたなら、無答で皆出てしまつたのださうな。梅がせき立てゝ一足走れば皆走つたのとあとで分つた。せんを呼び、仕事に出る前には挨拶して行くべくあらためて注意する。

せん、梅は豌豆えんどうちぎりから草とり。玉は蚕豆からまめちぎりから草とり。蚕豆を無暗むやみにちぎつた、と細君こぼす。十一時前に梅は勝手に、せんは桃の袋に呼ぶ。

余は日課。まだ出立の辺に愚図々々して居る。中々本音は出ない。『駈落』と書き、『追手』と書いて、あの旅行は余がお琴こと（『寄生木』の主人公のモデル小笠原善平の妹。）との駈落であつた（一方から見て）ことに気づく。お俊しゅん（小笠原善平の姉）が來ぬ前に

急いで逃げ出した〔この旅行は、蘆花夫妻に養女の鶴子〕のも其為だ。而して其お俊は若山〔當時のお琴の縁談の相手〕の約を帯びて来て居る。お琴の争奪を俊とやったのである。Madamこそ好い顔の皮だ。

星には豌豆飯。今年の初物。塩加減がよく、豆は少し軟らかいが、如何にもうまい。五はい喰ふ。

食後は乳母。それから暫時睡眠。それから新聞。タゴール新聞である。

●タゴール〔インドの詩人。五〕が先づ印度人の歓迎会に赴いたので、私の試験に及第した、と細君曰ふ。

福永馬鹿一〔福永良、警醒社書店社員、後に福永書店主〕手紙。警醒社〔東京京橋の出版社。社主は福永文之助〕から寄生木の金でもよこすのかと思ふたら、芝居の件だ。馬鹿々々しい。

茶には蚕豆。少し嫩らかいが、うまい。うまいが腹がふくれて居るので、少し食ふ。

四時から下りて、大工サン。植木台作り。釘細工で、折角出来たが、腰がぐらぐら、直ぐ平太張る。もつと簡易なものに明日作り直すことにする。其遺憾と手のくたびれで、弓を射て唯十三本しか中らなかつた。それでも黒が四本。玉が見て居る処で一本ボンと勢よく中つたのは愉快だつた。

せん、梅には桃の袋をかぶせさせ、カナブンをとらせなどする。

●はなれの底下にかさかさするのを見れば白い小猫だ。猫の玉が小猫を母屋に連れ込み、床の下住居をして居る。時々砂利に寝て、呼ぶと子猫が三足現はれる。人を見ると、床下に逃げ込む。人が居ないと、上り込むと、娘の玉が云ふ。うるさいから成る可く遠ざけると、猫の玉が連れ込んで人に押付けやうとする。今では母屋の床下から、はなれに往来して居るのである。

今日は昨日より暑いが、矢張風は涼しかった。

卓上で、ばら満月が咲いた。好い黄色である。これは第一番に咲いたが、其時は白つぽかつたので、ばら新から此黄薔薇について尋ねてよこした時、よく分からぬから『枯れた』とであらうさ、であるとして返事したのであつた。

『金盃』より好い、と夫婦賞翫。

●近所に石切る音、地づきの響がする。普請でもあるのか、といやになり、わづらはしく思ふ。橋を架けるのかも知れぬ。

●郵便屋が気分が悪く、せんが手紙を届けてくれたと期を押したら碌に返事もせず、玉公が郵貯の事を頼んだら、そんな事は知ンねえや、と云ふた、と細君語る。

腹はあまり減らぬが、夕飯はうまく食ふ。梅を「梅吉」と云ひ、せんを「せん太郎」と呼び、玉に「玉之助」の名を与へる。玉之助と云ふと、角前髪すみまがみの美少年を想はす。玉之助は好いと Madam が云ふ。

細君は今日から月病で、入浴も出来ぬ。腹も痛いうづと云ふ。気の毒である。

飯後、将棋。余勝つて、いたいたしくなる。

「明暗」。「エヂボス王」を聞き終り（妻愛子らに朗読させている）、奥へ退く。

長「W.C.」を出で、ネーヴルを食ひ、「エヂボス王」を語る。父を殺し、母を姦する、惨は惨だが、人間は運命より也大なるを思ふ者には大した悲劇でもない、と余曰ふ。「俺だつて、好い加減それ位の事はやつてゐる」と余曰ふ。現代人の悲劇は何だらう？ 細君曰ふ、平凡です。余曰ふ、力の不足であらう。（信仰の倒壊）と後で想ふ。父に妻を奪はれ、同僚から辱しめられたを機会に自殺した土方久元（元勲・維新の）の子の如き、随分真暗で、悲劇と云へる。あの親子は来生に如何様な関係で生れるだらう。関翁（一）なども可なり悲惨だ。斯く余曰ふ。

（一）関寛斎。医者。戊申戦争時の官軍の軍医。徳島での開業医生活を経て、明治三十五年、七十二歳で開拓を志し、北海道十勝国に移住。明治四十一年、蘆花を訪ねて、親交を持った。大正元年十月自殺。

○六月三日（土）晴

くたびれたと見え、勝手の方が起きたのは五時近かつた。例の如く余は洗面をすまし、炭俵の上に座つて花壇の草をとる。土下座は好い気もちだ。そこへ花をとり、Madam が来る。先生叩頭おじぎして「奥様、どうぞ一文やつて下さい

まし。それから起立して曰く、乞食程傲慢な者はあるまい。

久しぶりに屋敷の周囲を見廻る。田甫〔圃〕の方にはもう大麦の蒔られたのがある。蔬菜栽培の盛になったこと、隠いん元や胡瓜きゅうりの支条が密林の如く畑の中に立つて居る。火の見のほとりの掲示板は取り去られて見えない。林りん〔五郎の三男、鉄蔵家の書生〕が拵こしらえた勝手の方の目隠しが、頃日来の雨で大分下がり、浴室から台所が露はになつて居る。

農事手伝い」が拵こしらえた勝手の方の目隠しが、頃日来の雨で大分下がり、浴室から台所が露はになつて居る。

乳のあと、日記を書き、それから日課。自分には自然の直覚はあるが、人間の観察は皆無で、名古屋など些の所得がないには吾れながら呆然とする。

午前には玉を対象にした肉慾が可なり猛烈に動いた。妻を母にして、若い娘を取り換え引換え淫したい心根と見える。

日課を早く切り上げ、午餐前に髻剃。

●午前には物欲しくなり、甘納豆を四五粒食ふた。其処へ細君が来て接吻しつゝ甘いでしやうと云ふ。疵持つ足の気分で居ると、彼女も蚕豆の煮たのを塩梅あじばい見て来たと分かつた。実は俺もと自白し、これは喜劇だ、傑作だ、と手を拍つて飲む。

午餐の時、着物の話から、Madam は例も云ふ言を云ふ。それは、女は大抵同年配の者を観察する、然るに自身は二十前後の者ばかり観る、と云ふのだ。余曰く、それは余が若いからだ、俺が老ゆれば卿も直ぐ齢だけになる。又曰く、俺は男を見ないで、女ばかり見る。玉笑ふ。

午後は苺を食ふて、Bed に二人並び寝ながら、庭の青葉を眺める。山の上の趣がある。十年たつたら更に趣が深くなるらう。十年たてば、余が五十九で、本卦ほんくわ歸りに唯一年と云ふ男盛りに進む。細君が五十三だ。斯く云ひ合ふ。

それから郵便が来るので、細君は起き、余は臥したまゝ新聞を見る。細君は座敷の Sola に寝る。余の方に足を向けて居るのが癪に障り、追ひ立てる。憚はにかみずして彼女書院に去る。

●八畳の簾寢台に仰臥し、頭髮を松の梢を越して来る風に吹かせてうとくまどろむ。好い気もち。

勝手の茶の済む頃を覗ひ、着物を更えて下りる。今日は中々暑い日だ。せん、梅を指揮して、勝手元の目隠しを更に一段高くする。札幌から取寄せた穴掘器の使用始をする。如何にもよく出来て居て嬉しい。それから樋のごみを浚ふ。二人手伝ふ。梅の頸を手刀で斬る真似をする。あとで梅しげしげ旦那を見る。旦那の眼「tail」する。而して自分がいやになる。Madam が来て仕残しに気をつける。

●髻を剃つて大分色男になり澄まし、労働装をして、マダムと姿見の前に立つたら、実に吾れながらいやな緒顔の太腹の姿が現はれた。駄目だと慨嘆。

自分はそれから過日使ひ残しの油粕を花壇にやる。肥桶をかついで居たら、Madam が来て見て、ボン〔チ絵〕に描きたいやうな、笑ひ泣きたいやうな不格恰〔恰好〕と云ふ。

それから大弓。手腕疲れて、今日も不中〔あたらず〕。好い夕方、三日の月が淡く西の空に現はれる。

湯上に、玉が袷を背から被らせてくれる。Madam がはつと氣に障り、あついの、と声を出す。玉は無邪氣だ。男の大人と女の大人が其無邪氣の上に芝居を造る。

○六月四日（日）晴 八十二度〔華〕

今日は日曜で、ゆつくりしやうと思ふ。

乳の時、あらためて夫妻お早ふを云ふ。昨日細君の注意したに拘はらず、玉が平然として居たので、持った団扇で軽く玉の頭髮をおさへる。一つには礼儀を教へるのだが、実は其肉に触れたいからだ。眼鏡をとつて半田〔中目たき。妻愛子の友人。半田は旧姓〕式に老ける時はさもないが、眼鏡をかけて玉江式に笑ふ時は、御堂関白〔藤原〕の小式部〔小式部内侍。女流歌人。道長の子の教通の子を生んだ〕ではないがかき抱いて奥へ往きたくなる。昨日も朝乳の時、眼前に起居の玉を見て、子供々々しいのうたれ、小さいなと云ふた。樅堂翁〔原田弥平次。妻愛子の父〕が臨終前に娘を「こみやあもんな」と云ふたことを思ひ出した。昨午后、茶を奥に持参した時も、夫婦して小さいと謂ふた。男女としての愛ばかり長ずるのではない、父としての愛も長じつゝあるのだ。

Sofa に仰臥してゆるゆる新聞を見る。北海の海戦〔五月三十一日と六月一日のユトランド沖海戦〕では、英国の方が不利であつたやうだ。矢張英吉利に勝たせたい。時事新報に今日は小笠原お貞さん〔伯爵小笠原の事が出て居る。〕

新聞を終へ、日記を書きはじめに居ると、細君が来て、雨森さん〔幼稚園の保育母で小笠原家の家庭教師。〕が小笠原〔伯爵家、雨森劍子の家庭教師先〕の小娘二人連れて来たと云ふ。お劍さんには過日来、苺を喰はせたく、度々噂して居たのだ。

やがて玉が来て、安達と云ふ。貞一だな、と思ふ。一人か、ときく。女の方と御一緒と云ふ。婆さんか、若いのか。若い方。では、結婚したのだ。はなれに案内さす。

先生も実はおしやれだ。昨年、病院で細君が夫妻お揃ひに拵さへた紺縮の単衣を召し、団扇片手にはなれに出御。安達は去四月結婚したのだ。年は廿一、妙と云ひ、上野女学校出。家業は婦人装飾品、兄は慶応出で、最早二年余歐羅巴に居るさうだ。あまり惻巧さうにも見へぬ。情の方で、器用ではなく、あどけなくてお伽話や人形が好きと云ふ。

末女ださうだ。此結婚には色々の仔細がある、と云ふ。今は申上げられぬ云々。先生は去明治四十五年、大正元年の秋、安達が浅原〔丈平。湯淺治郎・初子の四女。象子の夫。教育家。〕と同時に來訪して以来の色々の事を拉々雑々と語る。Madam の病氣〔大正四年三月から六月、入院し〕、鶴子の事、面会謝絶の事、自分達の結婚前の事。それから一本槍の「人生の旅は二度通れない。螺旋状に歩くから、似た様な場合には来ても、層が違ふ、」だから現在を尊重し、充実したる生涯を送れ、駈足に過ぐすな」と云ふのだ。此方向いてはMadam と交り、彼方向いては心で玉の前を衝き、側面攻撃を時々梅やせんにふりかけ、

乃至最近の清、琴はじめ色々の若い女を思ふ此先生は、如何程充実した生活をして居るのだらう？と思ふと、しやべりつく可笑しくなる。

そこへ雨森さんが小笠原の娘二人を連れ苺採りに往くとして挨拶に寄つた。姉は八つ、妹は七つ、平民的な装をさせてある。長幹伯〔旧小倉藩主家の小笠原長幹〕に肖て居る、とあとで安達が云ふ。

今日は日曜、休息の筈だったが、不時の来客で大ごたごた。昼飯は豆の飯、苺、お客御持参の弁当の菜。子供にはぼんやりしたおっきの女中が一人ついて居る。好い器量ではないが、子供は矢張可愛い。